

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲口 甲口保 乙口 乙口保 口修	第7号	氏名	坂本 治美
審査委員	主査 岩崎 智憲 副査 伊賀 弘起 副査 片岡 宏介			

題目

Factors Influencing Dental Caries in 3-year-old Children: Effect of Prenatal Oral Health Examination on Behavioral Change

(3歳児う蝕に影響を与える要因：行動変容に対する妊婦歯科健康診査の有効性)

要旨

幼児のう蝕罹患率は減少傾向にあるが、1歳6か月から3歳にかけてはう蝕有病者率が急増する傾向がみられる。幼児期のう蝕に関連する要因として、間食の頻度や歯磨き習慣、保護者の口腔衛生に関する知識などが関係している。妊娠中の口腔環境を良好に保つことはその後の母子の健康管理に非常に重要であるが、自治体により取り組み方に差がみられる。本研究では、3歳児う蝕に影響を与える要因の分析、および後ろ向きコホート研究により、う蝕関連の口腔保健行動に対する妊婦歯科健康診査の有効性を検証することを目的とした。

研究対象者は、2015年から2020年までに徳島県鳴門市が実施した1歳6か月児健康診査と3歳児健康診査の両方で歯科健康診査を受けた647人の子どもとその母親である。二項ロジスティック回帰分析により、1歳6か月児または3歳児健康診査時のアンケート結果からの口腔保健の項目と3歳児う蝕との関連を分析した。さらに、妊娠中に定期的な歯科健診を受けていなかった対象者480名について、鳴門市が実施した妊婦歯科健康診査を受けた妊婦健診群と非健診群の2群に分け、出産後の口腔保健行動の相違を2群間で比較した。

3歳児のう蝕有病率は14.5%であり、間食回数または規則性、母親の定期的な歯科健診、歯周病に関する知識、母親または家族の喫煙習慣と有意に関連していた。また、出産後に定期的な歯科健診を受ける母子の割合は増加し、1歳6か月児の母親の定期歯科健診受診率は、妊婦健診群では非健診群に比べて有意に高かった。以上の結果、3歳児う蝕に関連する要因として、間食、定期歯科健診、歯周病に関する知識、喫煙習慣が示された。さらに、妊婦歯科健康診査は、出産後の定期的な歯科健診受診など、母親が自分自身や子供のための良好な保健行動獲得に影響を与える可能性がある。

本研究の成果は、母子保健推進への妊婦歯科健康診査の有効性を示す資料として有用である。それ故、本論文は博士(口腔保健学)の学位授与に値するものとする。